

林陽寺報

さくら

ホームページ

林陽寺

検索

岐阜市岩田西 3-402

林陽寺

058-243-1380

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

「而今」(ごん)

令和三年の新しい年が明けました。

檀信徒の皆様には、ご家族お揃いで、新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。



旧年中は、何かと林陽寺の護持にご理解やお力添えをいただき、心よりお礼申し上げます。

年頭にあたり、今年は『而今』という禅語をお届けします。

昨年来世界はコロナに犯され安心安全の生活が脅かされています。人類が時に犯される疫病の大流行。歴史を振り返れば、奈良時代の聖武天皇の御代大仏が開眼されたのも疫病終息への願いからと言われています。

「而今」とは、「今」この時。「今」この瞬間を大切に生きなければならぬ。ということを教えてください。

特にコロナの時代、明日ではなく、今を大切にを特に思うこの頃です。どうか皆様も希望ある未来の為に「而今」の二文字を忘れることなく精進を

合掌

令和三年行事予定

- 一月一日〜三日 新年の祈禱（早朝）
 - 一月三日〜七日 ぎふ七福神お開帳
 - 一月二十一日 大般若祈禱会
 - 二月十三日 涅槃会・婦人部会
 - 三月十七日〜二十三日 春彼岸会
 - 三月二十八日 しだれ桜コンサート
 - 四月八日 降誕会（花まつり）
 - 四月十七日 弘法大師祥当接待
 - 六月六日 奉仕作業
 - 七月二十五日 子ども禅の集い
 - 八月七日 山門施食会
 - 八月十三日〜十五日 お盆会
 - 八月二十四日 地藏盆
 - 九月二十日〜二十六日 秋彼岸会
 - 十月二日 開山忌・先祖供養
 - 十月五日 達磨忌
 - 十一月二十三日 七福神布袋尊大祭
 - 十二月四日 成道会
 - 十二月三十一日 除夜の鐘
- お経の会 第一土曜日 午後二時〜
 ヨガの会 第二土曜日 午前九時〜
 坐禅の会 第二日曜日 午前八時〜



写経教室



距離を保つての坐禅



開山忌の本堂の荘厳

伝戒大師鑑真和上来日に命をかけた美濃出身の僧「榮叡」(ようらい)

「戒律」とは、各自が自分で心に誓うものを「戒」、僧同士が互いに誓う教団の規則を「律」という。

今を去る約一三〇〇年前、聖武天皇の御代、奈良時代初期、日本の仏教界にはまだ戒律がなく、僧は納税の義務が免除されることもあって仏法を学ぶ姿勢もない僧が増えて風紀は乱れ、朝廷は頭を悩ませていた。

つまり、七三〇年頃、公地公民の制度が崩れはじめ、重税をのがれ、耕地を捨てて流浪の民となる



農民が増えはじめ、その内の相当数は寺院に入つて僧尼となり、課税を逃れるという動きが盛んになった。それを食い止めなければ国家の存亡が危うくなるため、戒律を厳しくすることによって、僧尼の墮落を正す必要が生じた。

当時、仏教の先進国であった唐では、新たに僧を志す者は、十人以上の僧の前で「戒」を誓う「授戒」という儀式を経て、正式に僧として認められるという制度がとられていた。国家が認めた伝戒授戒の師から受戒したもののだけに僧に公認すれば、一気に僧の数も減り、僧個々の質も高くなる。そう考えた朝廷は、この制度を日本に導入するため、授戒を詳しく知る名僧を日本に迎えるべく遣唐使に二人の僧を同伴させた。それが、後に鑑真和上来日に命をかけた僧として名高い、奈良興福寺の僧『榮叡』と大安寺の僧『普照』でした。

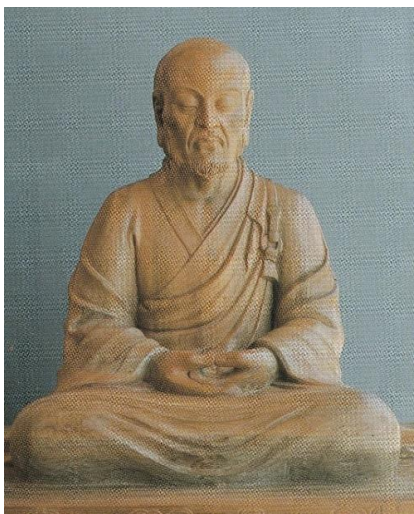
日本の仏教界に行動規範となる

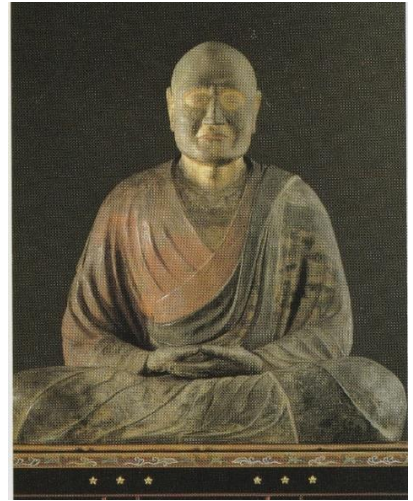
「戒律」が導入されれば、節度ある生き方が美德とされ、朝廷にも、ひいては社会にも良い影響が広がるはず……

しかし、この勅命は容易なものではなかった。この時代、遣唐使は文字通り命がけの事業だった。派遣された一二回の内、無事往復出来たのは五回のみで半数以上が遭難。さらに唐の国は国民の出国を禁じており、密出国の最高刑は死罪。国法を破つて、命をかけてまで日本へ渡る名僧など、簡単には見つからず、洛陽(河南省)の大福先寺で修業に励む傍ら伝戒の師を求めて遍歴。そして、来唐九年目の七四二年、陽州(江蘇省)

の大明寺に唐の高僧鑑真和上を訪ね、日本への戒律伝法を懇請する。

二人の熱意に心打たれ、思案の挙句和上は「法のため」と来日を快諾。ところが、名僧として名高いが故に、時の皇帝や弟子、民衆などに惜しまれ、また時には嵐や自然の力により、鑑真の渡日は阻まれ続けた。挑戦と挫折を繰り返すこと数回。和上の一行は、何度も日本に渡ろうとしたが失敗。その後、七四八年に五回目の出航を果たすが、またも嵐に遭い、十四日間漂流の後、海南島(海南省)にたどり着く。そこで、しばらく滞在し布教を続けるが、鑑真和上は失明。唐の揚州に戻る途中、七四九年榮叡は度重なる苦勞に病を端州(現広東省肇慶市)の龍興寺(現慶雲寺)において病没。異国の地でその生涯を終えることになった。榮叡来唐より一五年。誰よりも鑑真来日に力を尽くした留学僧は、ついに最後まで祖国の地を踏むことはできなかった。しかし、榮叡の遺志は受け継がれ、五





度目の挑戦時に鑑真は目の病により失明しながらも、再び渡航計画を練り鑑真は渡日に成功した。

第一回目の渡日計画から実に一年、挑戦六度目にして和上や普照らは日本の都に立つことができた。その志し半ばにして、異国の地に帰らぬ人となった榮叡の心中は如何ばかりであったであろうか。榮叡は四〇歳半ばと思われる。

井上靖の代表的歴史小説「天平の薨」にて描かれ、国交回復後『天平の薨』という映画が日中友好条約締結一周年を記念して昭和五四年（一九七九）に撮影され

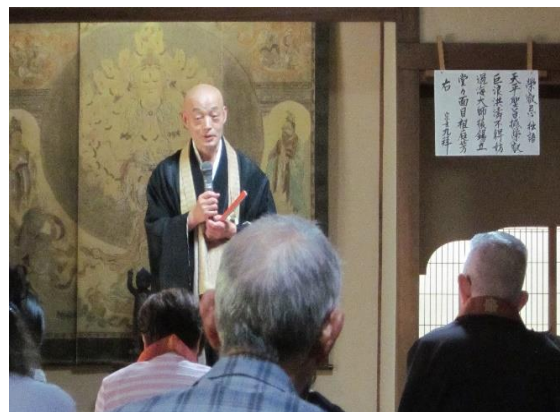
た。熊井啓監督の作品ですが、中国の全面的な協力を得て中国大陸でロケを行った戦後初の日本映画。昭和五五年（一九八〇）に映画が封切られた。荒れ狂う大海を越えて唐に留学した若い僧たちがあつた。故国の便りもなく、無事な生還も期しがたい彼ら。在唐二〇年、放浪の果て高僧鑑真を伴って普照はただひとり故国の土を踏んだ。鑑真来朝という日本古代史上の大きな事実をもとに、極限に挑み木の葉のように翻弄される僧たちの運命を、永遠の相の下に鮮明なイメージとして定着させた画期的な歴史小説であり映画であった。

昭和五八年中日友好協会の招きで、岐阜県日中友好協会が訪中。鑑真が命がけで日本渡航を決意するに至った経緯を中国の文献から、榮叡・普照のたび重なる懇願によるものとの記載があり、榮叡は、美濃の国の出身、奈良興福寺の学僧であったことが判明。時至って平成四年（一九九二）四月

名誉県民（県会議員）であつた古田好氏は帰国途上の機中で「二〇〇年も前に素晴らしい功績を遺した榮叡大師が未だ中国で眠っておられるとは。美濃の国（岐阜県）の一人として、一日も早く里帰りを実現しなければ」と心に誓った。帰国後早速「榮叡大師里帰り実行委員会」を結成し、経済界他多くの方々の支援を得て、四体の榮叡大師の坐像を制作し、榮叡ゆかりの奈良唐招提寺、興福寺、榮叡大師記念碑がある岐阜市の真福寺、本像は美濃加茂市伊深の正眼寺に安置し、大師の里帰りの一大事業を終えた。

その後、平成七年（一九九五）四月に「榮叡大師奉賛会」が設立され、一月六日「榮叡大師一二年座像奉迎慶讃大法要」が営まれ、翌日奈良唐招提寺にて一五〇年ぶりに師弟が対面。その折に当時の遠藤證園長老が「私たちは一二五〇年の間、鑑真和上のお像をお守りしてきました。みなさんも美濃のお像をしつかりお守

りしてください」と挨拶された。



顕彰法要後の山川老師の法話の様子

この言葉をいただいた参加者は深く心に刻み、未永くお守りしていくことを決意し、岐阜県檀信徒会と岐阜県仏教会を中心に「榮叡大師奉賛会」が設立された。

平成二三年一月に「榮叡大師お里帰り一五周年」奉賛会が盛大に開催され、来年二五周年を迎えることになっている。その間、毎年正眼寺において榮叡大師顕彰法要が営まれている。



林陽寺徒弟

岩水峰雪

師匠の口癖は「こういうのはキツチリしないといかんのや」でした。

今まで何となく聞いていたけど、けだったのですが、可睡齋（かすいさい）に御縁があつて上山させて頂いて、その意味を少しずつ理解できるようになってきました。

元々は在日外国人の支援をする仕事してました。師匠が元氣なうちに、次の事を考えていくという中で、三人姉妹の末っ子である私が出家する事になりました。多くのご縁やご協力をいただいて可睡齋に来ることが出来ましたので、感謝の気持ちを忘れず、大事な事を身に付けていきたいです。

今までの自分の価値観を0にして、0歳



のような気持ちで、精進していきます。

お檀家さん方にとつてもお寺はとても大切な場だと思ひますので、今後も末永くご縁を結んでいきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

合掌

お庫裏のツブヤキ

お地蔵様とよだれかけ

林陽寺にお参りいただくと、門前に狛犬さん、弘法堂の中に三休のお地蔵様、観音像の隣に二休のお地蔵様がいらっしゃいます。それらの像には赤いよだれかけが掛けられています。

このよだれかけは、お檀家のAさんが三〇年ほど続けて作って上げていただきました。ご主人が病床にあつた時は、「そろそろお地蔵さんが寒がつてござるぞ。」と、催促されたそうです。

Aさんが高齢になられた後を、今度はBさんが引き継いで、盆と正月前に届けていただけます。ま

さにお二人が積まれる功德のおかげでお地蔵様も気持ちよく盆と正月を迎えておられます。ありがとうございます。

お地蔵様は、代受苦をしていただけのお方であり、子どもを守っていた

だけの方でもありません。また、死後の五日に閻魔様の裁判を受けられる際に

「いやいやこの人はこんないいことをしていますよ。」と、口添えもしていただける方でもあるそうです。

こんなことも思い出して、赤いよだれかけをされたお地蔵様にお参りくださると、有り難いです。

合掌



第15回 しだれ桜コンサート

令和2年3月28日(日)

林陽寺本堂

午後1時00分～ (無料)



しいの実 コンサート